

Title	狭間からの呼び声 : まちなか相談室「風の舎」に集う人々
Author(s)	内村, 公義
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 78-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90077
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集 3

第8回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）

テーマ「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎」に集う人々」

狭間からの呼び声

——まちなか相談室「風の舎^{いえ}」に集う人々——

内村 公義

はじめに

「やってくるものを引き受けていくこと、それしかない」。これは『ゲド戦記』の訳者、清水眞砂子の言葉であるが、「風の舎^{いえ}」の基本姿勢でもあった。ある理念に基づき活動プログラムを立て、それを実行するために「風の舎」を始めたわけではない。2006年に長崎ウエスレヤン大学（長崎県諫早市）で「死生学」（Death and Life Studies）の講義を始め、市民・専門職が多数聴講するようになり、退職後、その勉強を続けたいという人々と共に「NPO 法人ウエスレヤン・コミュニティカレッジ」を設立したのが2011年。このNPOが、たまたま恰好の貸家があったので、「障がいや世代を越えて、誰もが目的なく居ることのできる場」にしたいと願って、死生学講座の受講料を主財源として、2012年に「風の舎」を開設した。その最初の活動の一つが不登校生の学習支援であったが、これも、たまたま、不登校の中学生の母親が死生学講座を受講するようになり、その縁で、英語の勉強をノートの添削から始めたのがきっかけ。やがて、開いたばかりの「風の舎」に来て、NPO会員の元教師や希死念慮の強い元学生がボランティアで勉強をみることになった。それが先程の発表者、六郷颯志さん。つまり、彼がやってきたので「風の舎」の学習支援が始まった。このように、「風の舎」は、向こうから呼ぶ声があったので、それに応えてきた、それだけである。結果的に見れば、それは制度の隙間からこぼれ落ちる者の声であり、あるいは制度では掬い取れない人間の深淵からの声であった。その幾つかを紹介して、制度の狭間に立ちつつ、その境界を越えようとしてきた「風の舎」の姿を伝えたい。

1. 事例 M.K.

「風の舎」に集う人々の中でいちばん多いのは精神障がいを抱える人々である。その一人 M.K.の話から始める。彼と最初に会ったのは、「風の舎」が開設される以前の2011年1月末であった。場所は、その頃まだ在職していた長崎ウエスレヤン大学の研究室。当時、この研究室では、1年前に卒業した学生たちが自分の抱える精神疾患などの生き辛さを語り合うフリートークスペース「にぎりば」を開いていた。このピアサポート活動を知った諫早

市健康保健部が、精神障がい者家族を対象に、当事者の話を聴く会を開いた。その参加者の一人が 26 歳の息子と共に私の研究室にやって来た。それが M.K.であった。彼は統合失調症と診断され、ひきこもり、家族とも全く話をせず、一日中ふとんにくるまっていた。その彼を両親が無理矢理引きずってきたのである。そういう最悪の条件下での初対面であったが、これが彼との決定的な出会いになった。

最初の挨拶を交わした後の長い沈黙。やがて彼がぼつりと呟いた言葉は「いま話すことに意味がない」であった。その後、沈黙を挟みながら途切れ途切れにもらした言葉を綴り合わせると次のようになる。「頭で考えていることと感じていることは別で、考えていることを話しても、それは感じていることではないのだから、いくら話しても意味がない。頭の中に感情の伴わない言葉だけがあって、話すのはそれをリピートしているだけ。それはふざけた自分で、そんなふざけた自分が話すのは罪を増やすだけ。息をすることも罪で、生きていてだけで罪が増す。だから死のうと思うが、死ぬこともできない」。彼はほとんど感情を表さず、内面の格闘を少しずつ吐露し、「ぼくは人間ではない、悪魔だ」と何度も繰り返した。語られるのは、強い罪責意識に悶えながら生死の境界を生きてきた日々についてであった。そのとき私が向き合っていたのは、統合失調症の患者ではなく、生きることの根本的矛盾に悩む裸の人間であった。そんな彼の眼を見つめていて、思わず私の口を衝いて出たのは「大胆に罪を犯せ、と言った人がいるんです」という言葉であった。長い沈黙の後、M.K.は突然感情を高ぶらせて、3年前に発症した時の状況を泣きながら再現した。

翌週、また話を聴いてほしいと、自分から進んで研究室にやってきた。そして、中学生の頃、被爆者の話を聞いた時の経験を話してくれた。そのとき、被爆体験を聞いても何も感じなかった。だが、感想文を書く段になって、何も感じなかったと言うのは話してくれた人に悪いと思って、ありきたりの「模範的な」作文を書いた。ところが、それが立派な感想文だとほめられ、クラス全員の前で朗読させられた。それが、感情と全く乖離した言葉を語る「ふざけた自分」の原体験であった。似たような経験が高校でも大学でも繰り返された。次第に言葉が出なくなり、何も話さなくなった。

「大胆に罪を犯せ」という言葉は、そんな「ふざけた自分」以外に自分はなく、その自分を背負って生きるしかない、あきらめとともに現実を受け入れる第一歩になった。彼はこの言葉を呪文のように称^とえながら、ふとんから出、家を出、図書館に行き、大学の研究室にやって来たのであった。

それから 11 年経つ。最初の 1 年は「にぎりば」に、その後は「風の舎」に毎週通うようになった。この年月の間に、2 回、症状が悪化し、入院している。「世界没落体験」と呼ばれるような幻覚妄想に悩まされたこともある。どう暮らして行こうかと起業を考えたこともあり、就労継続支援 A 型作業所に通ったこともある。症状という心身の苦痛や仕事・生活の苦労は、医療・福祉の制度的支援によって何とか対処できるものであり、実際、そのように対処している。しかし、彼の最大の悩みは、「自分は生きていていいのか」という人生の苦悩である。症状がほとんど消失し、障がい者枠の一般就労で生活も安定していた時期に、彼はこんなことを言っている。「私は今は安定している、落ち着いているように見えますが、内心は乱れ、すさんでいます。私が抱える問題は自分の心の闇（悪魔）を抱えたまま

生きていくのが辛い、生きていていいのか、という問題です」。根本無明とも言うべき、この人間存在の深い層の矛盾こそが彼の苦しみの元であり、それに由来する生きづらさ・息のしづらさは、最初の出会いの中で全て語られたのであった。この矛盾はおいそれと解決できるものではなく、「だから一時棚上げしている」と彼は言う。「でも時々棚おろしたくなります。その場が〈風の舎という経験〉なのです」。

M.K.のような人に対して「風の舎」がしてきたことは、社会復帰のための支援ではなく、精神療法・心理療法でもなく、あるいはスピリチュアルケアでもない。敢えて言えば、同行することである。一人で負いきれない重荷を、共に担うことはとてもできないが、「辛いね」と共にため息をつくことはできるかもしれない。そう思って、吐息とともに互いに笑みを交わしてきた。それが〈風の舎という経験〉である。以下、幾つかの事例を通して、この経験を浮き彫りにしたい。

2. (a) 事例 T.M.

T.M.は通信制高校3年生、17歳の女性。彼女が最初に「風の舎」を訪れたのは小学校4年生の時であった。母親が、生来の気質もあるが、夫との不和が原因で精神的に不安定になり、毎日の家事と娘の養育について、焦燥感に駆られていた。行政機関や宗教団体をはじめ至る所で不安な心情をぶちまけていた。その一つが「風の舎」であった。そんな母親がある日T.M.を連れてきた。母親が席をはずすと、T.M.は突然感情を爆発させて、泣き叫びながら、ホワイトボードに無茶苦茶な線のなぐり描きを始め、疲れ果てるまでやめなかった。母親との軋轢や学校での孤立がこの爆発の原因であった。次に彼女に会ったのは、通信制高校に入った時である。初めは週1回の登校であったが、母親と一日中一緒に居るのが苦痛で、週5日間登校のコースに移ることになった。しかし、それも不安で、退学したいと言い出し、母親が困り果てて「風の舎」に駆け込んできた。退学したいという理由の一つは、授業が分からないことであった。彼女はそれを自分が自閉スペクトラム症（中学生の時に精神科病院でそう診断されていた）でIQが低いせいにして、絶望的な気持ちになっていた。その上に母親へのアンビバレントな感情が重なり、学校でも毎日泣き叫んで教室に入れず、母親の突発的な行動がそれに輪をかけ、学校も対応に苦慮していた。とうとう学校からの要請で関係機関によるケア会議が開かれるまでになった。学校教員の他、通院している精神科病院の医師と看護師、母親が時折診察を受ける病院の精神保健福祉士、諫早市子ども支援課の担当者、同少年センターのスクールソーシャルワーカー、それに「風の舎」も加わった。結局、母親の気分変動や焦燥感による行動にも、T.M.の学習支援にも、「よろずや」的に関われる「風の舎」が、学校と連携して対応することになった。具体的には、学校に行けず、家で母親と共に居ることもできない時に、「風の舎」が逃げ場になった。そして、この逃げ場の確保により、T.M.は学校生活を続けることができるようになった。

T.M.は元来勉強が好きで、数学のノートを見ると驚くほどの問題を解いているのだが、少しでも分からぬところがあるとパニックに陥り、「分からない！」と泣き叫ぶのであった。私は、この「分からない」と泣く姿に希望を見た。たとえば、数学の公式がどう導き出され

のか、途中で分からなくなる。いくら説明されても分からない。どこが分からないかが分からない。学校では「暗記せよ」と言われるが、それができない。みんなはそうしているのに私にはできない。発達障害で知恵遅れだからなのか。そう訴える彼女に「分からないことを分からないと言うのがいちばん大事なことだよ」と言って、何がわからないかを一緒に考える。それは本人から教えてもらうしかないのだが、本人も何が分からないか分からないのだから、これが分からないとは言えない。ああでもない、こうでもない様々な説明を試みたあげく、あっ、分かった、という所にたどり着く。こうして何が分からなかったかが分かる。そこから T.M. の驚くような成長と変貌が始まった。

このように「何が分からないか」を共に暗中模索するのが、「風の舎」の流儀である。「まちなか相談室」と称しているが、「今日はどうなご相談ですか」とは決してたずねない。何を相談したいかが分かっているのなら、「風の舎」には来ない。他に相談機関は沢山ある。

「その問題は管轄外です」とたらい回しされても、どこかに行き着く。しかし、「私はどこに行きたいのか分かりません。私はどこに行きたいのでしょうか」と道をたずねるような話は、だれからも相手にされない。それを一緒に考えましようと言って、あれこれ、とりとめもない話をしているうちに、あっ、これが私の求めているものだ、と気づく。そういう場が「風の舎」である。

T.M. が分からなかったことの根本は「ワタシ」であった。学校ではだれからも見向きもされないワタシ、家庭では両親の不和に悩まされながら、実はその不和の原因になっているワタシ、ワタシってナニ？——これが「分からないこと」の中核であった。彼女は今その分からない自分に分からないまま付き合おうとしている。そういう「思考の体力」（鷲田清一）を身につけてきたのが、彼女の見事な成長である。

2. (b) 事例 K.Y.

「相談室」でも「カウンセリングルーム」でもない「風の舎」の特性をよく物語るのが K.Y. の経験である。彼は中学 2 年で不登校になり、そのまま 25 歳まで引きこもりの日が続いた。その間ずっと長崎大学病院で月 2 回のカウンセリングを受けてきた。「風の舎」に来るようになって、やがてぽつりぽつりと自分の内面を話すようになった。それは、これまでどこでも、だれにも話したことがないものだった。10 年来受けてきたカウンセリングでも話したことがなかったという。どうして話さなかったのかと尋ねると、「カウンセリングだったから」という答えが返ってきた。毎回、母親に連れられてカウンセリングルームに入るのだが、病院の診療プログラムに参加するという感じで、問診のように、問われることに答えるだけだったという。では、なぜ「風の舎」では過去の辛い経験を思い出したり、胸の奥にあった思いが言葉になって出てきたりしたのか。そう問うと、答えは、「風の舎」が散歩先だったから。引きこもっていて、運動不足で肥満になり、せめて週 1 回ぐらいは外に出て歩かねばならぬと考えていた矢先に「風の舎」を紹介された。自宅から徒歩 20 分のいい距離だったので通うようになった。到着すると、お茶が出され、汗をふいて、ひと休みしているうちに、自然に会話が生まれ、気づいたら自分の思いを話していた。目的なく来て、

何もたずねられず、黙って座っておられるのが良かった、という。

3. 事例 N.K.

「風の舎」に集う人々は多かれ少なかれ制度的支援を受けている。したがって、それらの諸機関との連携が欠かせない。長崎県女性・子ども・障害者支援センター、長崎県央保健所、諫早市少年センター、等が連携機関の一例である。これらの機関の支援を受ける中で当事者が困るのは、担当者が2~3年で変わることである。少年センターを例にとると、中学1年で不登校になり、「ふれ合い学級」に通い、学校に復帰して、高校に進学する。そこで新たな問題にぶつかり、相談するともなしに少年センターに足を運んだとする。ところが、スタッフが全部変わっていて、知っている人が誰もいない。「何か？」とたずねられても、「いや別に」と淋しく立ち去ることになる。少年センターの相談員も継続的支援の必要性を痛感しているのだが、いかんともしがたい。

「風の舎」ではどうか。N.K.は中学1年でいじめが原因で学校に行けなくなった。校門の前で足がすくみ入れない。少年センターに行くがなじめない。「風の舎」に来て、ずっと寝ていた。泣いてばかりいる時期を経て、自分がいじめられた経験を話し始め、その相手と対決するまでに成長した。中学卒業後は昼間定時制高校に元気に通うようになったが、ある朝、通学カバンを持ったまま「風の舎」にやってきた。「友人関係で落ちこんでいます。今日は学校に行けません。一日ここに居らせてもらえませんか」。2年近く経って、またやってくる。「退学したい」。担任教師も「風の舎」に来てくれる。両親をまじえて話し合う。そして、1年間休学して通信制に移ることになる。その後、音沙汰がない。それは元気にしている証拠と安心してると、また2年経って、「勉強させてもらえませんか」とやって来る。数学Ⅱの最後の試験が赤点、追試でも赤点だったら卒業できない、という。このあとで対談する吉野大輔さんが大学は工学部だったので、「一緒に勉強してくれないか」というわけで、今回のフォーラムのチラシ下段の写真になる。彼の場合、さらにおまけがつく。無事卒業して福祉関係に就職したが、時を経ずして入社できなくなる。会社まで行くが中に入れない。そこでまた、どうしたらいいか、一緒に首をひねる。こうして、彼は13歳から20歳までの8年間、「風の舎」と関わり続け、挫折を繰り返しては、それをのり越えた。そうできたのは、いつ来ても、そこに変わらぬ顔ぶれのボランティアスタッフが居たからであり、これまた顔見知りのメンバーが談笑しており、その輪の中に自然に入ることができたからである。

4. 事例 M.H.

最後にM.H.という小学4年生の男子児童を紹介する。原因が分からないまま不登校になり、学童保育クラブにも行けなくなった。学童保育支援員は学校と連携しながら原因を探ろうとしたが、かえって事態を悪化させてしまった。学校から紹介されて長崎県子ども医療福祉センターに相談に行き始めたが、本人はそれを拒否して、引きこもりがちになった。そう

いう経緯があって、「風の舎」にやってきた。私と面談したが、ほとんど何も話さなかった。一つだけ話したのが、学童保育クラブでいつもしているケン玉遊びのことだった。それが得意だと言うので、ケン玉を「風の舎」のみんなに教えてくれないかと頼んだ。帰ろうとすると、その日のボランティアスタッフが連れてきていた3歳のDちゃんが手を振った。それに対して、M.H.が嬉しそうに笑った。それで、「Dちゃんにもケン玉を教えてね」と言うと、大きくなずいた。次の週、Dちゃん来る日に合わせて、M.H.はやってきた。Dちゃんは言語の発達に遅れがあるのだが、そのDちゃんを喜ばせようと、ケン玉だけでなく、ボールや折り紙も持ってきた。そして、「風の舎」のボランティアスタッフや他の来訪者にケン玉を教えた後、Dちゃんとボール遊びを始めた。二人とも全く嬉しそうだった。その時のスナップがチラシの右上の写真である。こうしてDちゃんと何回か遊んでいるうちに、不思議なことに、M.H.は再び学童保育クラブに通うようになり、さらに学校にも通うようになった。さまざまな専門職（学童保育支援員、小学校のクラス担任、特別支援学級担当教員、長崎県子ども医療福祉センターの小児科医）が解決しようとしてできなかった問題が、無心の子ども同士の間で解消したのである。支援-被支援の関係が固定される制度的支援の対極にあるような、人と人の自然な支え合いの原点を見る思いがする。ほほえみ合う二人の子どもの笑顔は「風の舎」がめざしてきたものの象徴である。

むすび

あらためて、〈風の舎の経験〉とは何であったかを考える。3歳から85歳までが障がいの有無を越えて、日常的に時間を共有している。読書会や懇談会など様々な催しも開かれているが、みんながそのプログラムに参加するわけではない。ある日の風の舎。ボランティアスタッフと久しぶりの来訪者がお茶を飲みながら談笑している。少し離れたところで読書しているメンバーがいる。精神障がいの女性が車椅子の男性に「幻聴さん」の話をしている。その声を耳にしなが、中学生がノートを開いている。隣の部屋には、疲れて横になっている人がいる。屋外で、花壇に苗を植えている人もいる。そして、スタッフ以外は誰も居ない時もある。今日、紹介した人も、しなかった人も、みんな、そういう一言で表せないような不定形の時空間の中に、自分の居場所を見つけるとともに、そのことによって人と人のつながりを創ってきた。そして、その生まれ出るつながりの胎動に、他ならぬ私自身が生きる勇気を与えられてきた。

「風の舎」は2021年5月に閉じたが、この胎動は、公民館のロビーで、地域の寄り合い所で、アパートの一室で、駅前の公園の一隅で、今も続いている。この最後の例は、「独りで部屋に閉じこもらないで一緒に話をしよう、木曜日の午後4時に待っている」と呼びかけて、大村駅前の公園に立っている73歳の精神障がい者である。その姿に、私はいま、「呼びかけてくる声」を聞いている。

(うちむら・きみよし)